

やんばるをメインフィールドに47年

昆虫写真家 湊 和雄

1970年代まで、沖縄県以外で「やんばるは何処にあるか分かりますか？」の問いに正確に答えられる人は極めて少数だった。何しろ、行政上の地名ではないので地図を探しても載っていない。それが現在のように多くの人が知ることになった転機は、1981年のヤンバルクイナ、1983年のヤンバルテナゴコガネの発見である。どちらも100年に一度の大発見と称されたものだ。

アマチュアも含め多くの観察者のいる野鳥の世界。もう国内で新種の鳥の発見の可能性はないというのが定説になっていた。それを覆す大発見。しかも鳥なのに飛ばず、夜間は歩いて樹上に登るという実に不思議な生態の主だった。また、実にフォトジェニックな愛らしいキャラクターなものも注目を集める要因だった。さらに100年に一度の大発見と言われたにもかかわらず、その2年後には、日本最大の甲虫ヤンバルテナゴコガネも発見された。

「やんばるとは何処か？」この問いの解答は簡単なようでいて、実は難しい。簡単に言えば、沖縄本島北部なのだが、行政上の地名ではないので、その明確な境界線は存在しない。「やんばる」という名称は、漢字では「山原」と表記し、よく言えば自然豊かな地域というイメージだが、未開の地という否定的なニュアンスも含まれる。そのため、時代によってもやんばるの範囲、特に南限は微妙に変化している。高齢者の感覚だと恩名村以北という割合が高い。現代では、本部（もとぶ）半島を含めた名護市以北というのが一般的な感覚だろう。さらに、多くの希少種、固有種の生息地帯である生物学的にコアなやんばるは、西海岸の塩屋湾と東海岸の平良（たいら）湾を結んだ



(写真1) 新緑に輝くやんばるの森

STライン以北と言われる。これは、やんばる国立公園の範囲ともほぼ一致する。

筆者が沖縄を認識したのは幼少期。理系の研究者だった母方の祖父の書斎には、専門以外の図鑑も数多く並んでいた。その中から世界昆虫図鑑を引っ張り出して母と一緒に眺めていた。勇ましい昆虫、大きな昆虫など興味を持った種に「何処で見られるの？」と質問を母に何度もぶつけた。しかし、その答えはどれもアマゾン、東南アジアなど遠い外国ばかりだった。このときのがっかりが昆虫少年にならない大きな原因になったと今でも思っている。「日本には面白い昆虫はいないんだ……」と。しかし、精巧な枯葉への擬態で興味を抱いたコノハチョウでは、母は「琉球」と答えた。そして「琉球は沖縄のこと。今はアメリカが治めているけど、いつか日本に返ってくるでしょう」と続けた。そのときから、いつか大人になったら沖縄へ行ってコノハチョウに会うんだ。というのが夢になった。

筆者は昆虫写真を生業としている。そこに行き着くのは、小学校5年のときにロバート・キャパの『ちょっとピンぼけ』を読み写真家に憧れたことが起点だ。しかし、筆者の世代では中学のときに既にベトナム戦争も終結に向かい、従軍カメラマンは現実的な選択肢とは言えなかった。そして、中学3年のときにカメラ雑誌に載っていた栗林慧氏の「沖縄の昆虫」という作品に出会った。それまでの昆虫写真は人間が昆虫を見下ろしたアングルであったのに、氏の作品を観ていると、まるで昆虫の世界の一員になったような錯覚を覚える衝撃が走った。そのときから、昆虫写真家を夢見るようになった。しかし、昆虫少年ではなかったので、昆虫に対する知識は乏しい。これを補うために大学で昆虫学を修めることを選択した。

1978年に琉球大学に入学した。自然豊かな沖縄を夢見て降り立った那覇市は、想像以上に大都会だった。緑に乏しく昆虫の姿も少ない。そのことを嘆くと「やんばるに行かないとだめよ」という言葉を返されるのが常だった。



(写真2) カムフラージュして撮影する筆者

このとき初めて「やんばる」を意識したのだった。鉄道のない車社会の沖縄。やるべきことは、まず自動車運転免許の取得だった。入学した1978年は車の右側通行最後の年だった。その右側通行での教習を受け、運転免許証を取得した。間もなく中古車も入手し、念願のコノハチョウに会いに行った。精巧な擬態者ゆえに、そう簡単には見つからないだろうという心配はあっけなく打ち破られた。翅を閉じていれば完璧な枯葉なのだが、実際に生きているコノハチョウは度々翅を開き、とても鮮やかな翅の表側を見せるのだった。長年の憧れの人に会った途端、思わぬ一面を見せられた想いだった。



(写真3) 翅を閉じ、枯葉そのもののコノハチョウ



(写真4) 翅を開くと鮮やかで目立つコノハチョウ

入学から2年後に希望の昆虫学教室に配属された。その翌年にヤンバルクイナが発見されたのだ。しかし、その当時は昆虫が頭の大半を占めていたので、それほどインパクトはなかった。だが、さらに2年後のヤンバルテナゴガネの発見は衝撃だった。捕獲された最初の個体が琉球大学昆虫学教室に届けられた際、大学院生としてその場に居合わせた。それまでの昆虫は小さいものという概念を覆す圧倒的な存在感だった。そして、このような大型昆虫が見つからずにいた、やんばるの森の奥深さに強く感嘆させられた。「100年に一度の大発見」と言われる新種発見に、連続して地元でリアルに遭遇できた幸運に感謝した。

それを機に、ヤンバルテナゴガネやヤンバルクイナに一度でも多く遭い



(写真5) ヤンバルクイナの親子

たくて、毎週末のやんばる通いがスタートした。



(写真6) ヤンバルテナガコガネの羽化シーン

また、ヤンバルテナガコガネ調査チームの一員にもなり、数多くの希少なシーンを体験することができた。基本的な生活史を調べるために研究室で人工飼育もされていた。あるとき、その蛹（さなぎ）が羽化の前兆を示した。今晚その瞬間を迎えると確信し、撮影の準備をした。しかし、研究室の他のメンバーは未だ早いと判断し、筆者だけが残った。そして翌早朝、羽化の瞬間を一人で迎えた。

ヤンバルテナガコガネ発見当時、「やんばる」と呼ばれる沖縄本島北部地域には、

15 種の天然記念物指定動物（種指定種）が生息していた。その後アマミヤマシギが加わり 16 種となった。

- ・ノグチゲラ（特別天然記念物）※
- ・ヤンバルクイナ（国指定天然記念物）※
- ・ホントウアカヒゲ（国指定天然記念物）※
- ・カラスバト（国指定天然記念物）
- ・アマミヤマシギ（沖縄県指定天然記念物）
- ・オキナワトゲネズミ（国指定天然記念物）※
- ・ケナガネズミ（国指定天然記念物）
- ・リュウキュウヤマガメ（国指定天然記念物）
- ・ヤンバルトカゲモドキ（沖縄県指定天然記念物）※
- ・オキナワイシカワガエル（沖縄県指定天然記念物）※
- ・ナミエガエル（沖縄県指定天然記念物）※
- ・ホルストガエル（沖縄県指定天然記念物）
- ・オキナワイボイモリ（沖縄県指定天然記念物）
- ・ヤンバルテナゴコガネ（国指定天然記念物）※
- ・コノハチョウ（沖縄県指定天然記念物）
- ・フタオチョウ（沖縄県指定天然記念物）

※やんばる固有種

その後、分類の見直しなどが行われた種もあり、2025 年 8 月現在で半数の 8 種がやんばる固有種となっている。これはやんばるという生態系の希少性の象徴でもある反面、やんばるで絶滅すれば地球上からその種の消滅という脆弱さの裏返しでもある。

やんばるの範囲は前述のとおり曖昧である。前述の名護市以北だと仮定するれば、約 645km²、大宜味村（おおぎみそん）、東村（ひがしそん）、国頭村（くにがみそん）の 3 村の合計で約 340km²。これほど狭い範囲内に 16 種もの天然記念物指定動物が生息しているのは、極めて稀な例である。

やんばる通いが始まって数年経ったとき、果たしてこれまでに 16 種の天



(写真7) ヤンバルテナゴコガネ雄成虫。日本最大の甲虫

然記念物のうちどれだけを撮影しているのか数えてみた。その結果は、ちょうど半分の8種だった。数年で半分ならば、もう少し頑張れば全種撮影可能なのではないか？ 全種撮影して写真集にまとめようと思い立った。しかし、そう甘くはなかった。当然のことながら、撮影どころか遭遇すら難しい種が残ってしまった。最後の2種は、ケナガネズミとオキナワトゲネズミのネズミ2種。ケナガネズミは頭胴長と尾長を合わせて70cm近くにもなる日本最大の野生ネズミだ。現在は増加し目撃も珍しくなくなったが、当時20世紀には年間の目撃報告が数例の時代だった。筆者自身も20年間で4回5個体にしか遭遇していない超希少種だった。しかし、運良く撮影に成功し、最後にオキナワトゲネズミが残った。何しろ20年以上目撃されておらず、専門家ですら絶滅を口にする状況だった。リュウキュウマツの実の芯だけを残して食べるのは、オキナワトゲネズミ特有の行動という論文があり、その食痕を見つけては自動撮影を試みると、クマネズミばかりが写っていた。しかし、ある場所でサワガニの殻が林床に散らばる光景を見て、自動撮影を試みたところ、一晩で36コマすべてにオキナワトゲネズミが写っていた。



(写真 8) 1993 年に 17 年ぶりに撮影し、生息が確認されたオキナワトゲネズミ

当然のことながらフィルムカメラ時代の話だ。1993 年のことである。こうして初めてやんばるの天然記念物指定動物全 16 種の撮影に成功し、念願の写真集『山原の自然—亜熱帯の森』(平凡社刊)を上梓した。

これと同時に、大学院修了後 8 年間勤務した大学資料館を辞し、フリーランスの写真家となった。これで曜日や時間を気にせず、やんばる通いが可能となった。天候などが許す限り、毎週 2 泊 3 日ペースの撮影行を現在でも続けている。

やんばるとは、具体的にどのような自然生態系なのだろうか？ 高い山はない。最高峰の与那覇岳でも標高 503m。さらに大きな河川もない。南北に細長い沖縄本島は中央分水嶺から海岸線まであっという間に届いてしまう。このような条件では、あまり生物の生息に適した環境ではない印象を受けるかもしれないが、そこには深い亜熱帯樹林が発達していて、世界的な希少生物の宝庫なのだ。国内ではトップクラスの生物多様性を誇る、日本のホットスポットである。その多様性の根源となっているのが、大きな流れの代わ

りに網の目のように発達している溪流環境。そこには水中、水面というバラエティに富む環境に加えて、周囲には溪流植物に代表される豊かな植物相にも恵まれている。そのために多くの動物たちの共存を可能としている。

小さな島の集合である島嶼生態系ゆえに、空間、餌資源は限られている。そのため、やんばるには大型動物は分布しない。最大でもリュウキュウイノシシだ。このリュウキュウイノシシも原名亜種ニホンイノシシの2分の1から3分の1のサイズしかなく、フォスターの法則（島嶼生態系では大型動物は小型化する）にも合致する。多様性を維持しているのは、構成している生物種のほとんどが昆虫など小動物が占めているからなのだ。やんばるだけではないが、沖縄県全域に分布する昆虫種は、2002年発行の『琉球列島産昆虫目録（増補改訂版）』によれば約6500種。これは日本全土の約30000種の2割強になる。日本における沖縄県の面積は0.9%に過ぎないことを考えれば、これは驚異的な数字で、ラポポートの法則（低緯度地域ほど狭い範囲に多くの生物種が生息する）に合致する。

やんばるに通い、やんばるの希少生物を撮影する毎日だったが、常に危機感と隣り合わせの状況だった。それは、やんばるの森の伐採が続いていたからだ。1987年に知床の伐採問題が連日全国ニュースで取り上げられた。それは大径木のみを切り、ヘリコプターで搬出するという伐採方法だった。一方、希少種・固有種の宝庫やんばるの森では下草まで皆伐してしまう伐採法が広範囲で繰り返されているのに、全くニュースにもならない。これには強い憤りを禁じえなかった。1993年には白神山と屋久島が世界自然遺産に登録された。2005年には前述の知床も登録された。もう、やんばるの森を守るには世界自然遺産登録しか道はないと思ったのだが、なかなか進展しない。そうした中、2008年に自然遺産登録のための予備視察が琉球列島^{*}で行われることとなった。その際、ユネスコに登録のための意見を答申する海外研究者を、やんばるに案内をする役を担った。後になってやんばるの森での視察が最大の決め手となったと聞き、これまでやんばるで過ごしてきた

^{*}琉球列島は、トカラ列島から八重山諸島までの亜熱帯の島々。尖閣諸島、大東諸島は含まれない。

日々が報われた想いだった。2011年には同じ亜熱帯島嶼生態系の小笠原諸島も登録。2016年にはやんばるが国立公園に指定された。その後紆余曲折があったが、2021年に、奄美大島、徳之島、西表島と共に沖縄島北部（やんばる）が、念願の世界自然遺産に登録された。事実上、日本国内で最後の自然遺産登録地と言われている。

しかし、世界自然遺産に登録されたからと言ってこれは決してゴールではない。まだまだ、外来種、ロードキル、オーバーツーリズムなど問題は山積状態だ。これらの問題を解決できないと、世界危機遺産という不名誉が待っていないとも限らないのだ。少しでも良い状態で、やんばるの森が次世代に受け継がれることを祈ってやまない。